

副詞的 2 格の言語史的背景

— 具格的属格の成立に関するベハーゲルの疑問の解明 —

渡 辺 有 而

I. 現代ドイツ語

現代ドイツ語の規範文法で概ね副詞的 2 格として一括して扱われるものに、eines Tag(e)s, eines Abends などの時を表す状況語と並んで、付随的状況・様態を表す少数の熟語的表現がある。そのうち辞典に記載されているものは、unverrichteter Dinge / Sache (目的を果たさずに)、meines / unseres Erachtens(私の/我々の考えでは)、eilenden / festen / leichten / stehenden / trockenen Fußes (急ぎ足で、しっかりした/軽やかな足どりで、即座に、足をぬらさずに)、baren / bloßen / entblößten Hauptes (無帽で)、erhobenen / gesenkten Hauptes (昂然と頭を上げて、首うなだれて)、klopfenden / leichten / schweren Herzens (胸をときめかせて、軽い/重い心で)、frohen / leichten / offenen Sinnes (楽しい気分で、気楽に、大らかな心で) などであるが、これら以外の表現も現代文学作品に時折見られることがある。

- (1) sie...verließ den Schwerbetörten außerordentlich *zufriedenen Gemütes*¹ (彼女は心が非常に満足して、彼女にひどく惑わされた男から離れた。Walter Serner: *Der Saulump*, 1923) ;
- (2) Und in der Tat kam hinter ihm der Bischof: *fliegenden Gewandes, ...hochgeschwungenen Krummstabes*², (すると本当に彼の後から司教がやって来た、衣をなびかせ、曲がった杖を高く振りながら。Heimito von Doderer: *Bischof — tollgeworden*, 1930) ;
- (3) der Mann mit der roten Mütze, *dienstefrigen Gesichts*, schrie, als ob er es in die Wartehalle eines großen Bahnhofs rufen müsse³: (その赤い帽子をかぶった男は、仕事熱心な顔つきで叫んだ、まるで大き

な駅の待合室の中へ呼び掛けねばならぬかのように。 Heinrich Böll:
Die Botschaft)

- (4) als er bei mir eintrat, *gesenkten Blickes*⁴, (彼が私のところへ目を伏せて入って来たとき, Gertrud von le Fort: *Die Opferflamme*, 1938);
- (5) Es handle sich, erwiderte er *gedrückten Tones*, um ein Werk der Vergangenheit⁵, (過去の作品のことです, と彼は抑えた口調で答えた。同書) ;
- (6) <Dazu braucht man nicht immer Apparate> , sagte der Fremde beiläufig und *gleichgültigen Tons*⁶. (<そのために道具が必要だとはかぎりません> とその見知らぬ人は, さりげなく且つ無関心な口調で言った。 Heimito von Doderer: *Ein anderer Kratki-Baschik*, 1972) ;
- (7) und so ging ich, von Grauen geschüttelt, *mäßigen Schritts* den Feldweg hinunter⁷, (そして私は恐怖に震えて, 適度な歩調で野道を下って行った, Franz Fühmann: *Das Judenauto*, 1962) ;
- (8) Er fixierte die verwachsenen Blumen, um dann mit erhobenem Stock auf sie zu stürzen und *blutlosen Gesichts* auf das stumme Gewächs loszuschlagen⁸. (彼は曲がった花々を固定した, その後でステッキを振り上げ花に向かって突進し, 血の気の失せた顔で物言わぬ植物を叩き落とすために。 Alfred Döblin: *Die Ermordung einer Butterblume*) ;
- (9) ihm eifrig das entgegenbringend, was sie sonst, schelmisch *erhobenen Fingers*, ihm so gerne verzögerte⁹. (彼女が普段はいたずらっぽく指を上げて好んで彼に対して引き延ばしたものを, 熱心に彼の方へ持って行きながら。 Hermann Broch: *Methodisch konstruiert*)
- (10) als Philippine eines Morgens, den Kaffee bringend, *zurückgeworfenen Kopfes* ihm zuflüsterte¹⁰: (或る朝フィリッピネがコーヒを持って来て, 頭を後ろに反らせて彼にささやきかけたとき, 同書)
- (11) <Dein ist mein Herz> , beteuerte er *abgeschmackter*, aber *allerzärtlichster Weise*¹¹, (「僕の心は君のものだ」と彼は, 面白味はないがこの上なく優しく断言した。 Thomas Mann: *Der Zauberberg*, 1924)
- (12) er bestand aus zwei miteinander nahverwandten Eckstrophen,

die *frommen* Charakters, ja, fast im Stile des protestantischen Chorals gehalten waren, und einer Mittelstrophe keck-chevaleresken Mutes¹², (彼の歌は、敬虔な性格をもって、それどころか殆どプロテスタントの賛美歌のスタイルでなされる二つの互いに似た両端節と、大胆で騎士的な勇気の間節とから成っていた、同書)

- (13) Und plötzlich erschien *raschen Schrittes* der große Geiger¹³, (突然、速い足取りでその偉大なヴァイオリニストが現れた。Hermann Hesse: *Virtuosen-Konzert*)
- (14) Seine blauen Augen unter den blonden Brauen... waren *gebrochenen Blicks*, wie bittend, auf den Kapellmeister gerichtet¹⁴, (プロンドの眉の下の彼の青い目は、意気消沈した眼差しで、頼むように指揮者に向けられていた。Thomas Mann: *Wälsungenblut*, 1921)

これら14の例文は、筆者が4冊、約1,800ページの短編集(抜粋を含む)から集めたものである。平均130ページ弱に1個という頻度は決して高くはないが、様態・付帯状況の属格が現代でも新しい表現を生み出す力を失っていないことを示している。後述するように、属格のこの用法は古高ドイツ語やギリシャ語において高度な発達を遂げたものであり、したがって現代ドイツ語で用いられるときは、古風な雅語として文体的効果を発揮する。また例文(8)のように前置詞を用いた分析的表現(mit erhobenem Stock)と属格のみによる総合的表現(blutlosen Gesichts)とを並列させて、文体の変化をもたらす効果もある。例文(2)の hochgeschwungenen Krummstabes と同様に属格を用いて erhobenem Stocks とすることを避けたのは、明らかに作者デーブリーンの文体的意図によるものである。

以上のことから、様態・付帯状況を表す現代ドイツ語の属格に関して次のような特性が読み取れる。

1. 辞書にある定式的表現のうち、男性名詞は2語(Fußes, Sinnes)で8個の熟語を造り、中性名詞は3語(Erachtens, Hauptes, Herzens)で10個の熟語を造る。これに対して女性名詞と複数名詞は各1語(Sache,

Dinge), 熟語は2個に過ぎない。また文学作品に現れた非定式的表現においても、男性名詞は7語が10回 (Blickes, Schritts, Ton(e)s が各2回, Charakters, Fingers, Kopfes, Krummstabes が各1回), 中性名詞は3語が4回 (Gesichts 2回, Gemütes, Gewandes 各1回) 用いられているが、女性名詞は1語 (Weise), 複数名詞は無い。即ち属格特有の語尾-(e)sを持つ男性・中性が圧倒的に多く、それを持たない女性・複数は格の明示性に欠けるために、使用されることが非常に少ない。

2. 名詞の意味に関しては、体と心を表すものが過半数を占める。とりわけ定式的表現では、前者は Fußes (熟語5個), Hauptes (5個), Herzens (1個)¹⁵, 後者は Sinnes (3個), Erachtens (2個), Herzens (2個)で、それ以外の名詞は、事物の一般名称である Sache Dinge (各1個)のみである。一方非定式的表現はやや多彩である。即ち、体を示すものが Gesichts (2例), Fingers, Kopfes (各1例), 心を表すものに Gemütes (1例)があり、合わせて14例中の5例であるが、Blickes (4例)¹⁶と Schritts (2例)は体の部位の動きを表し、Tones (2例)もこれに準ずる。また事物を表すものに、一般的な名称である上述の Sache や Dinge とは異なり具体的な物の名称である Krummstabes, Gewandes (各1例)があり、抽象名詞も Charakters と Weise (各1例)が見られる。

3. 大半は冠詞・冠詞類を伴わず強変化形容詞のみを規定語とする簡潔な形式で、meines / unseres Erachtens のみが例外である。

4. Stil-Duden に、„baren, bloßen, entblößten Hauptes / mit barem, bloßem, entblößtem H.“という記述があり、同様に心・体・物に関する他の表現も「...をもって」の意味で付随的状况を示す。また unverrichteter Dinge / Sache も「果たされなかった物・事をもって」という付随的状况を表す。一方、例文(11)の abgeschmackter, aber allerzärtlichster Weise は「面白味はないが、この上なく優しい方法/やり方で」という手段を表し、meines Erachtens は meinem Erachtn nach が併記されているように、「私の判断によれば」という観点を表すと思われる。

II. インド・ヨーロッパ諸語の格機能・格形態の対応関係と古ザクセン語・古高ドイツ語の具格的表現

さてこのような付随的状況・手段・観点を表す総合的表現として、本来は道具・同伴を表した印欧祖語・古インド語の具格がある。格語尾の相違が弱まるにつれ格形態の融合が進行し、具格の機能をギリシャ語では与格・属格・対格が、ラテン語では属格・対格が、それぞれ担うに至ったとされる。

しかしこの通説には注意を要する。なぜなら格の融合(Synkretismus)は印欧祖語において既に始まっているからである¹⁷。特にそれが強く現れているのは両数で、主格・対格・呼格；属格・位格；与格・具格・奪格がそれぞれ同一形態を取り、八つの格機能を僅か三つの格形態が担っている。また中性の名詞・代名詞・形容詞は単数・複数とも主格・対格・呼格が融合し、更にすべての性において単数では0-語幹以外では属格と奪格が、同じく複数では与格と奪格が形態的に融合を起こしている。格の融合に関する通説でもう一つ注意すべき点は、形態的融合及びそれに伴う総合的表現から分析的表現へという言語史の流れは、必ずしも同一方向にのみ向かうのではなく、時には逆流するという事実である。ギリシャ語が放棄した奪格形をラテン語が復活させ、しかもこの格が位格と具格の機能をも吸収して強力な混合格へと発展したこと、ギリシャ語・ラテン語にもなかった具格形が古ザクセン語・古高ドイツ語において、突然地上に湧き出た地下水流のように出現し多用されたこと、ロシア語・チェッコ語などの近代スラブ諸語の造格(=具格)に印欧祖語・古インド語すら持たなかつた述語的用法が加わり、印欧語の具格の歴史において例を見ない多彩な機能を発揮するに至ったこと、などがその好例であろう。

次ページの「格機能・格形態対照図」¹⁸は、両者の関係の歴史的变化の一端を示したものである。

このように具格は位格と共に、既にギリシャ語・ラテン語において独立した形態を失い、他の格及び前置詞句による代替形にその機能が移った。これに対し、スラブ系言語¹⁹と古ゲルマン系言語の多くは具格を保持

格機能・格形態対照図 1

ラテン語	印欧祖語・古インド語	ギリシャ語
主格	主格(Nominativ) の機能	主格
呼格	呼格(Vokativ) の機能	呼格
対格	対格(Akkusativ) の機能	対格
属格	属格(Genitiv) の機能	属格
与格	与格(Dativ) の機能	与格
	具格(Instrumental) の機能	
奪格	奪格(Ablativ) の機能	
	位格(Lokativ) の機能	

しており、豊かな格形態を駆使した総合的表現は、インド・ヨーロッパ語を歴史的立場から研究する際の力強い支えとなる。

ゲルマン祖語には名詞・代名詞・形容詞の具格形があったと推定されるが、4世紀後半、民族大移動の初期にウルフィラがギリシャ語から訳したゴート語聖書には名詞の具格はなく、疑問代名詞の中性単数 *ive*²⁰ が10箇所 (例 *ip jabai salt baud wairpip, ive gasupoda?* Luk. 14, 34 塩に塩気がなくなれば、何によって味を付けられようか。)、指示代名詞の中性単数 *pe* が1箇所 (*ni pe haldis* Sk. 4, 22 「それによってより以上...ではない」とは「決して...ではない」の婉曲表現である)、不定代名詞 *hwazuh* (= jeder) の中性具格形 *hveh* が2箇所 (例: *ei hveh wrakja galgins Xristaus ni winnaina* Gal. 6, 12 ただ彼らがキリストの十字架の故に迫害されたくないばかりに) に用いられている。これら3語以外の場合は、ゴート語はそれが手本としたギリシャ語と同じく、具格的与格・具格的属格及び前置詞 *mip* + 与格を具格的表現として用いる。

古英語 (700-1150) には、単数の男性・中性共通の具格形として、指示代名詞 (= that)・定冠詞 (= the) の *þon*, *þy*, *þe* と指示代名詞 (= this) の *pys*, 及び強変化形容詞の *-e* 語尾があり、また単数の男性・女性・中性共通の具格形として疑問代名詞の *hwý*, *hwí*, *hwon*, *hwan* がある。それ以外はゴート語と同様に、具格的与格または前置詞 *wip*, *þurh*, *to*, *for* + 与格を以て代替形とする。

古ノルド語(9-16世紀)は全く具格を持たず、具格的与格または *mep, vip, af* + 与格を用いる。

民族大移動時代の6世紀に北イタリアに王国を建てたランゴバルド族の言語財を集めたブルックナーは²¹、公証人テウデルプスが俗ラテン語で作成した文書の一節 „Taso receipt...a supradicto Astreperto launu manicias parium unum“ (タソーは上述のアストレペルトゥスから報酬として一双手袋を受け取った)の中の launu をランゴバルド語の a-語幹名詞の単数具格と見なし、このゲルマン系言語に主格・対格・属格・与格・具格・位格の六つの格を認めている。

古ゲルマン諸語の中で異彩を放つのは、ゴート語の4種類を上回る5種類の具格的表現を擁する古高ドイツ語と古ザクセン語である。即ち1) 名詞・形容詞・代名詞の男性・中性具格 (-u / -o) 2) 前置詞 *mid / mit* + 具格 3) 具格的与格 4) 前置詞 *mid / mit* + 与格 5) 具格的属格 がそれである²²。その用例を「ヘーリアント」と「オットフリート」から引用する。

- 1) 具格 : *than ik bithuungan uuas thurstu endi hungru, / frostu bifangan eftho an feteron lag,* (Hel. 4398f. 私(キリスト)が飢えと渴きに圧迫され、寒さに捉えられ、或いは鎖に繋がれて横たわっていたとき)

Íngiang er tho skíforo, gólđo garo zíero, (Otf. I. 4, 19 彼(司祭ザカリアス)は直ちに中へ入った、金で美々しく身を飾って)

- 2) 前置詞 + 具格 : *lêrde the landes uuard liudi sine / mid hluttru hugi*²³. (Hel. 1382f. 国の支配者(キリスト)は彼の民に教えた、清らかな心で。)

*Síe nan ouh tho quáltun, mit ézzichu drángtun, / mit bítteremo líde*²⁴; *thaz dátun se al bi níde.* (Otf. IV. 33, 19f. 彼ら(兵士たち)は彼(キリスト)をそこでも苦しめ、酢を飲ませた、苦い飲み物を。それらすべてのことを彼らは憎しみのゆえに行った。)

- 3) 具格的与格 : *lêrde thea liudi liohtun uuordun, / hláđero stemnun;* (Hel. 3909f. <キリストは> 人々に向かって教えた、はっきりした言

葉で、大きな声で)

tho spráh er wórton hēizen, (Otf. IV. 13, 40 そのとき彼 (ペトロ) は熱烈な言葉で語った)

- 4) 前置詞 + 与格 : sie it ôk giseggian ni mugun / te uuâran *mid* iro *uuordun*, (Hel. 4302f. 彼ら (天使たち) はそのことを言うことが出来なかった, まことに彼らの言葉で)

Joh fállent sie ginóton fora iro fianton, / úntar iro hánton spéron²⁵ joh *mit suérton*; (Otf. III. 26, 43f. また彼ら (勇者たち) は必ず敵の前で死ぬ, 敵の手の下で, 槍と剣にかかって)

- 5) 具格的属格 : hietun hōbidband *hardaro thorno* / ...uuindan (Hel. 5499f. 彼ら (パリサイ人たち) は固い刺で冠を編むように命じた)

Hietun sie thuo uuirkian uuâpnes eggion / heliðos *mid* iro handon *hardes bōmes* / craftiga crūci (Hel. 5506ff. 彼らは男たちに命じた, 武器の刃を用いて, 彼らの手で, 固い木で, 頑丈な十字架を作るようにと)

Dúa, so ih thir zéllu, thiú selbun thíng ellu / *gibōrgenero werko*, (Otf. II. 20, 5f. 私が汝に語る如く, それらの同じことをすべて隠れた行いでなせ)

Sie spráχhun thuruh mínna al *éinera stimna*, (Otf. I. 9, 11 彼ら (嬰兒ヨハネの親族) は愛情に駆られて異口同音に語った)

例文5) の Hel. 5506ff. では, 2行半の文に, 具格的与格 (eggion), *mid* + 与格 (*mid* iro handon), 具格的属格 (*hardes bōmes*) という3種類の具格的表現が使われ, 文体の変化をもたらしている。同じく「ヘーリアント」の

hêlag drohtin / uunode *mid* is *uuerodu*, antat he...huarf / te Bethania *brahtmu thiú mikilun*, / *mid thiú* is *gōdum gumscepi*. Iudeon bisprákun that / *uuordu gehuilicu*²⁶, (Hel. 4187ff. 聖なる主は彼の民と共に <その町に> 留まっていた, やがて主は大群衆と彼の良き弟子たちの群れと共にベタニアへ向かった。ユダヤ人たちはそのことを, 言葉を口にするたびに語った。)

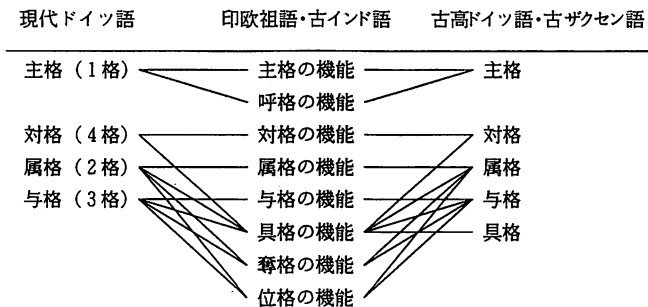
の箇所では、具格 (brahtmu thiu, uuordu gehuilicu), mid + 具格 (mid uuerodu, mid thiu...gumscepi), 具格的与格 (mikilun) が用いられ、また「オットフリート」の、

Ni wás thar ther firstúanti, waz er *mit thiu* meinti, / ouh thia múatdati *theheino mezzo* irknáti. / Súme firnámun iz in tház, wanta er sékilari wás, / thaz híazi er io *then wórtan* waz ármen wihtin spénton, (Otf. IV. 12, 45ff. 彼 (キリスト) がそれで <ユダに言った言葉で> 何を意味したのかを理解し、その意図を何らかの方法で見分けた者は、一人もいなかった。或る者は、自分が会計係だったので、キリストがその言葉で、貧しい人々に何かを施すよう命じたのだ、と理解した。)

の部分でも、mit + 具格 (mit thiu), 具格 (theheino mezzo), 具格的与格 (then uuorton) という3種類の具格的表現が見られる。これらの多彩な表現は、古高ドイツ語と古ザクセン語にのみ可能であると言ってよい。

前掲の「格形態・格機能対照図」の方法を、印欧祖語・古インド語と古高ドイツ語・古ザクセン語、及び現代ドイツ語との間に適用すると、次の図が得られる。

格機能・格形態対照図 2



本稿の冒頭に挙げた *eines Tag(e)s, eines Abends* は位格的属格であり、*unverrichteter Dinge* から例文 (14) の *gebrochenen Blicks* までは具格的属格である。Der Schreck beraubte ihn *der Sprache*. (驚きのあまり彼は口がきけなかった) の下線部は「言語に関して」が原義と考えられ、具格的属格に区分できる。次に *Seine Verlegenheit strafte seine Worte Lügen*²⁷. (彼の当惑ぶりから、彼の言葉が嘘だと分かった) の属格は「嘘のゆえに」という理由を表す具格的属格であり、*Man bezichtigte ihn des Betrugs*. (彼は詐欺の罪を着せられた) も同じ用法である。また *Damals war er mit seiner Frau des Landes flüchtig*. (当時彼は妻と一緒に国外に逃亡していた) や *Man hat den faulen Schüler der Schule verwiesen*. (その怠惰な生徒は放校処分を受けた) は、それぞれ *aus dem Land fliehen*, *jn. von der Schule verweisen* の意味で「...から」を表す奪格的属格である。これら位格・具格・奪格の代替格としての現代ドイツ語の属格に対し、代替格としての与格の用例を示そう。上例と同じく「...から」を意味する与格、*Der Polizist nahm dem Fahrer den Führerschein ab*. (警官はそのドライバーから免許証を取り上げた) や、*Gas entströmte den Leitungen*. (ガスが管から漏れた) の下線部は奪格的与格と説明できる。更に *Er sah ihr das Gesicht an*. (彼は彼女の顔を見つめた) や、*Die Freunde zogen ihm das Geld aus der Tasche*. (友人たちは彼に散財させた) などのいわゆる所有の3格は、本来その動作が「彼女・彼において」行われたことを示す位格的与格である。

さて格機能・格形態対照図1及び2で示したように、ギリシャ語にも古ドイツ語・古ザクセン語にも多用された具格的与格の、現代ドイツ語における用法は限られている。即ち具格的機能の大半は与格から前置詞による分析的表現に移行し、本論文の冒頭に挙げた比較的少数の具格的属格がこれを補っている。道具・手段は *mit* や *durch* で、理由・原因は *wegen* や *für* などで、代償は *für* で、材料は *aus* や *mit* で、付随的状況は *mit* や分詞構文、或いは *indem* に導かれる副文で、同伴は *mit* で、差異は *um* または単独の対格でそれぞれ表されている。また関係(...に関して) は成句 *was...betrifft* や *in, mit* などで表現される。*mit der Arbeit anfangen, mit der Wohnung wechseln* は「仕事に関して始める」

「住居に関して変更する」という意味で, *Wie geht es mit Ihrer Arbeit? Was ist los mit Ihnen? Ich habe mit ihm nichts zu tun. Ich bin mit ihr fertig.* と同様に, 関係を表す具格的表現であり, 現代英語においても *How are you getting along with your work? I have nothing to do with him. I have finished with this foolishness. Let it be a rule with us.* のように *with* が用いられる。具格的与格の名残を留めているものとして *Er lebt nur der Arbeit.* (彼は仕事のためにのみ生きている) などの目的の与格 (finaler Dativ), *Er trägt ihr den Koffer. Sie hat mir den Teller zerbrochen.* などの利害の与格 (Dativus commodi / incommodi), *Daß du mir nicht zu spät kommst!* などの, 或る行為に感情の上でのみ関与していることを表す関心の与格 (Dativus ethicus) が挙げられる。これらの任意の与格 (freier Dativ) のうち, 目的の与格は *für die Arbeit* の意味であるので具格の原因・理由を表す機能の, また利害・関心の与格は関係・観点を表す機能の, それぞれヴァリエーションと考えられる。

いわゆる副詞的 4 格の一つである, 比較級と共に用いられ相違の程度を表す対格 (*Er ist drei Jahre älter als ich.*) は具格的対格と名付けることが出来る。なお同じく副詞的 4 格と呼ばれる *Er hat vier Jahre Kunstgeschichte studiert.* (彼は 4 年間, 美術史を専攻した) や, *Er läuft hundert Meter in elf Sekunden.* (彼は 100メートルを 11秒で走る) の下線部は, 古インド語の対格の機能の一つである「時間或いは空間の間断なき継続」²⁸に遡るもので, 格融合によって生じた上述の様々な代替格とは, 言語史的な発生の事情が異なる²⁹。

III. ギリシャ語聖書ルカ伝の具格的属格と, ラテン語・ゴート語聖書及び古高ドイツ語の「タツィアーン」におけるその対応形

ギリシャ語の四福音書の中ではマタイ伝とルカ伝が, 文法的・文体的にマルコ伝・ヨハネ伝と比べて遙かに洗練されており, 研究・教育のテキストとして好適である。しかしゴート語聖書には, マタイ伝の第 5 章第 15 節の途中までの部分が欠落しておりギリシャ語聖書との比較が出来ないので, ルカ伝を取り上げた³⁰。但し古高ドイツ語の「タツィアーン」

の原典である、2世紀シリアの学僧タティアヌスの総合福音書が、四福音書を再編集し重複する箇所を省いたものであるため、欠けている聖書の箇所が少ない。

ギリシャ語聖書ルカ伝で具格的属格が用いられている7例³¹に対応する箇所は、ラテン語聖書はすべて具格的奪格、ゴート語聖書は欠けている1箇所を除き6例すべてがギリシャ語に倣って具格的属格を用いており、「タツィアーン」は具格的属格が2例、具格1例、欠落4箇所である。

ルカ伝には「聖霊に満たされる」という表現が3度(1,15; 1,67; 4,1)見られるが、すべてラテン語のみ具格的奪格、他の3言語は具格的属格である³²。例えば「彼(ヨハネ)の父ザカリアは聖霊に満たされた」(1,67)は、それぞれ次のように記されている。

gr. Ζαχαρίας ὁ πατὴρ αὐτοῦ ἐπλήσθη πνεύματος ἁγίου
lat. Zacharias pater eius impletus est *Spiritu Sancto*
got. Zakarias, atta is, gafullnoda *ahmins weihis*
ahd. Zacharias sîn fater uuard gifullit *heilages geistes* (Tat. 4,14)

「会堂にいた皆が怒りに満たされた」(4,28)、「全身が癩病にかかった人」(5,12)も同様である。

gr. ἀνὴρ πλήρης λέπρας (5,12)
lat. vir plenus *lepra*
got. manna fulls *prutsfillis*

また「彼(主)は飢えている者たちを良い物で満たした」(1,53)の部分では、ギリシャ語・ゴート語の具格的属格、ラテン語の具格的奪格に対し古高ドイツ語では具格が用いられ、独自性を示している。

gr. πεινῶντας ἐπέπλησεν ἀγαθῶν
lat. esurientes implevit *bonis*
got. gredagans gasopida *riupe*

ahd. hungerente gifulta *guoto* (Tat. 4,7)

印欧祖語・古インド語における具格の用法の一つに「代価・交換」があり、「5羽の雀は2アサリオンで売られているではないか」(12,6)の下線部はギリシャ語で具格的属格, ラテン語で具格的奪格である³³.

gr. οὐχί πέντε στρουθία πωλοῦνται ἀσσαρίων

δύο;

lat. Nonne quinque passerres veneunt *dipundio*?

IV. 具格的属格に関する諸説とその問題点

グリムは、動詞と共に用いられる古ゲルマン諸語の属格が他の格と接触する場合の第15項目で「明らかに具格的な力をもつものは、積み込む・着せる・満たす・投げるなどと共に使われる属格」と述べ、「着せる」の類義語の「包む」、反対語の「脱がせる」もこれに加えている³⁴。例えばゴート語聖書の *ei fullnaip kunpiis wiljins is* (Kol. 1,9 あなたがたが神の御旨の知識に満たされるように); *saei skamaip sik meina jah waurde meinaize* (Mac. 8, 38 私と私の言葉を恥じる者は), 「タツィアーン」の *intuuatitun inan lahhanes inti gotouuebbes inti giuuatitun inan sinen giuuatin* (200,4 兵士たちはイエスの紫の服を脱がせて、元の服を着せた), 「オットフリート」の *lúad sia hártio guates ioh suásliches múates* (V. 12, 90 使徒パウロは愛に、善良で優しい心を付与した); *ih wísero wórto giwáron iuih* (IV. 7, 23 私は汝らに賢明な言葉を賦与する); *hiaz thiú sehs fáz gifullen / wázares thie síne* (II. 10, 3f. キリストは弟子たちにそれら六つの樽を水で満たすように命じた), 「ヘーリアント」の *rôbodun ina thia reginscaðon, rôdes lacanes* (5497 不埒な者たちはキリストの赤い服を脱がせた); *he imu mahti libbien forð / ferahes gefullid.* (4034f. ラザロは生き続けることが出来る, 生命力に満ちて) などである。「タツィアーン」200,4 (上掲) の *lahhanes inti gotouuebbes* は関係・観点を表す具格的属格 (...に関して) と解するのが妥当であろう。現代ドイツ語に雅語として残る *jn. eines Dinges berauben* や、そ

れに相当する現代英語の *rob one of something* も同様に解釈できる。但しグリムは、単に属格と具格との接触として現象的に記述するに留まっており、全く異なる特性を持つ二つの格の間になぜそのような接触が起こるのか、という積極的な問題意識を示してはいない。

ベルンハルト³⁵は「或る対象物またはそれに属するものは、道具と見なすことができるので、属格は具格の代替形となり得る」という主観性の強い心理主義的類推説に基づいて説明し、「ヘーリアント」における「疑う余地の無い例」として上掲の5497を含む4箇所を引用している。ni mugun eldibarn *ênfaldes brôdes/libbien*, (1068f. 人はパンだけで生きることは出来ない)；uas im iro hugi thiustri./ *bahuues* giblandan. (5287f. 彼らの心は暗かった、悪を混ぜられて)；andrêd that he thene uueroldcuning / *sprâcono* gespôni endi spâhun uuordun (2718f. <ヘロデ王の妃は> ヨハネがこの世の王に弁舌を以て、賢明な言葉で迫るのを恐れた)。2718f. の例文では具格的属格 (*sprâcono*) と具格的与格 (*spâhun uuordun*) が併用されている。なおベルンハルトは、「多分これに属する」ものとして *sô ine uualdand god / fan hebenuuange hêlages gêstes / gimarcod* (2790ff. 天国の支配者なる神は、ヨハネに聖霊で印を付けた) を挙げている。これは1086f. や2718f. と同じく道具・手段の具格的属格で、「疑う余地の無い例」に入れるべきである。

一方、テールブリュックによれば具格的属格は二つの源を持つ³⁶。一つは got. *fulljan* (満たす), *gasôpjan* (満足させる) の補足語として属格と具格が同等に使われたことであり、これが ags. ahd. *blandan* (混ぜる), ags. ahd. *hladan* (積み込む) など本来は具格を取る動詞に波及し、更に ags. *hrêodan* (飾る), ahd. *weren* (着せる) が *hladan* に倣ったと説明する。そして ags. *weorpan* (投げつける) もこのタイプに属するとする。もう一つの源は「話す・言う」という意味の古高ドイツ語・古ザクセン語の動詞と共に具格的属格が用いられることである。sprah imo *thero wôrto* in mûat tho filu hârto: (Otf. IV. 13, 12 <キリストは> それらの言葉でベテロの心に向けて大いに語った)；frâgoda sie

firiuitlico / *uufsera uuordo*. (Hel. 815f. <12歳のキリストは> 知的好奇心に溢れて、賢者たちに賢明な言葉で質問していた)がその例である。テールブリュックはこれらの用例の大半において「言葉」が複数属格で、単数属格は *giwuag er wórtes sines thes selben álten nides* (Otf. V. 25, 70 <ヒエローニムスは> 彼の言葉でその昔からの敵意に言及した) のただ1箇所であることから、*uuorto* が本来は部分の属格だという推測が可能だと述べる一方、具格的与格の *uuorton* が「話す・言う」と共に多用されるため、読者に *uuorto* にも具格的意味を感じさせると言い、次の箇所を引用する。 *Er zált iz in ouh háрто ófonoro wóрто* (Otf. IV. 1, 17 <キリストは> 弟子たちにそのことを非常に率直な言葉で語った)。この文には対格の *iz* があるため、下線部は部分の属格ではなく具格的意味と解釈するほかないと、彼は論じている。

このように具格的与格 *uuorton* の多用が属格 *uuorto* に具格的意味を感じさせるに至ったというテールブリュックの説は、20世紀初頭のドイツ言語学界を風靡したパウルの心理主義的類推理論の影響が濃厚であり、後述するようにベハーゲルにも時折その傾向が現れる。言語史のみが言語学であることを標榜したパウルが、客観に徹すべき言語史研究の方法の一つとして主観性の強い類推を採用したとき、致命的な自己矛盾に陥ったことに、当時のドイツの言語学者たちの多くは恐らく気付かなかったであろう。彼らの理論に不徹底さと主観性がしばしば現れるのも、その当然の結果である。「満たす・満足させる」という動詞の補足語として属格と具格が同等に使われたことを、具格的属格の源の一つに数えるとき、なぜ両者が併用されたのか、という真の源へ遡って問いを発する姿勢がテールブリュックには見られない。具格的機能と属格的形態との融合についてはベハーゲルを扱う際に述べるが、客観的な言語研究に不可欠である数量的手法が全く採用されないことも、この意味で当然と言わねばならない。即ち具格的与格 *worton* が「話す」などの動詞と共に「多用される」、という彼の前提は曖昧で説得力に乏しい。*worton* は「オットフリート」において具格的与格として33度用いられるが、「ヘーリアント」における *uuordun* の75度には及ばない³⁷。また後者には *uuordun* との複合語である *gorn-* (嘆きの言葉で)、*hosc-* (嘲りの言葉で)、

sōdduurdun(まことの言葉で)が各1例あり、行数は前者のほうが約25%多いため、使用頻度はほぼ1対3である。したがってデールブリュックは、多用に基づく類推という仮説を立てる際に、「オットフリート」ではなく「ヘーリアント」をこそ引き合いに出すべきであったろう。

ベハーゲルの大著「ドイツ語統語論」において具格的属格の記述に相当するのは、「原因の属格」「認容の属格」「関係の属格」「手段と方法の属格」の各節である³⁸。

(A) 原因の属格を取る動詞には、a) 情動の動詞 b) 「死ぬ」 c) 「寝める」「叱る」「償う」「償わせる」 d) 「答える」 e) 「遊ぶ」などがある。a) はゴート語聖書の *sildaleikjandans andawaurde is gapahaidedun* (Luk. 20, 26 彼ら<律法学者・祭司長たち>は彼<キリスト>の返事に驚いて沈黙した), 「タツィアーン」の *Thie...min scamenti uuirdit* (44, 21 私を恥じる者は) などで、「オットフリート」では *angusten / suorgen* (不安になる), *sih bliden / frewen* (喜ぶ), *sih wuntoron* (不思議に思う) など15個の動詞が原因の属格を取る: *Wio mag wésan thaz io só thaz ünser iuih égiso?* (V. 4, 39 汝ら<女性たち>が我々<天使たち>を恐れるとは、どうしてそのようなことがあり得るのか)。そしてこれらの属格は、ラテン語の *me miseret / piget / poenitet / pudet / taedet* (私は同情する・不快になる・後悔している・恥じる・退屈している) と共に用いられる属格と比べることが出来るが、他の属格とどのように関連するかは未だ不明である、とベハーゲルは論述する。しかし古インド語の具格は、喜ぶ・満足する・笑う・驚く・恥じる・嫌うなどの精神作用に関する動詞に伴われることがあり、奪格もまた「恐怖・嫌悪・疲労・倦怠を意味する語と共に」(辻 278ページ) 現れる。即ち情動の原因という機能において、具格と奪格が競合していた。一方、形態に関しては前述のように、印欧祖語において既に *o-* 語幹以外では単数の属格と奪格は格融合を起こしており、古インド語の名詞・形容詞も単数の属格・奪格は、男・女・中性とも格語尾の基本形は *-as* である。このように機能面での具格と奪格の競合と、形態面での属格と奪格の融合との接点に奪格が位置しており、これが媒介して道具・手段、原因・

理由などの具格の機能が属格にも及んだと筆者は推論する。従って所属・従属・所有、全体の一部などの属格本来の機能と、具格的属格の機能とは発生において全く異質のものと思ふのが、「原因の属格は他の属格とどのように関連するか」という、70余年前にベハーゲルが発して以来説得力のある解答が得られなかった問いに対する正当な答えである。

原因の属格が b) 「死ぬ」と共に用いられるのをベハーゲルはノートカー以後とし、彼の用例 *hungeres irsterbent* (彼らは飢えて死ぬ) と、具格を使った「オットフリート」の *hüngiru nirstirbist* (II. 22, 22 汝は飢えて死ぬことはない) とを対比させる。但しその逆を表す場合には「オットフリート」にも属格が見られる：*würtun tôte man ouh quêke sines wörtes* (IV. 26, 18 死者たちもキリストの言葉で甦った。なお現代ドイツ語にも *vor Hunger sterben* と並んで *Hungers sterben* という雅語がある。

c) の「償う・褒める」などの場合の例は *Ni ward io in wóroltztin, thi u zisámane gihítin, / thaz sih gésto guati súlihhero rúamti.* (Otf. II. 8, 5f. 結婚している者たちがこれほど尊い客を誇りとする^{こと}は、かつてこの世になかった) ; *that iu thes man ni lobon, / ni diurean thero dâdeo* (Hel. 1570f. 人々が汝らをそれ (注：祈りのために身をかかめること) 故に褒めたり、それらの行為の故に讃えたりしないように)。現代ドイツ語にも、原因の属格とは感じれなくなった *nicht der Mühe lohnen* (苦勞の甲斐がない)、*sich der Mühe verlohnen* (苦勞の甲斐がある)、*jn. Lügen strafen* (...の嘘を暴露する) などの定式的な表現が残る。

d) の「答える」は用例に乏しく、ノートカーの *do antwurta ih iro thes* (N. I. 260, 11 私は彼女にそれに対して答えた)、*「ニーベルンゲン」の des antwurte Sivrit* (122, 1 それに対してジーフリトは答えた) などである。

e) の「遊ぶ」の場合、遊びまたはその対象が属格で表されるが、ベハーゲルは *spielen* の原義が「生き生きと元気にあちこち動き回る」(グリムのドイツ語辞典) であることから、これを情動の動詞と関連する原因の属格と思ふ。この用例もノートカーから始まり、*tisses spiles spilon*

ih (N. I. 60, 24 この遊びを私にする)や「パルツィファル」の *hōhes topels er spilt* (115, 19 彼は高い賭金を賭けて勝負する) などがある。

名詞の具格的属格が a) ~e) 以外の動詞と結び付くことは稀である：Ni quam ik undar thesa theoda herod / te thiū, that *mīn* eldibarn *arbed habdin*, (Hel. 3533f. 私は、人々が私のことで苦勞するために、この世の人々の所へ来たのではない)；thaz si únreini *thera gibúrta* fīarzug dago *wurti*；(Otf. I. 14, 12 彼女 <注: 出産した女性> は出産のために40日間不浄になると <律法は命じている>) これに対し代名詞の属格 es, des, wes は、様々な動詞と共に用いられる：uuê *uuarð* thi, Hierusalem, *thes* thu te uuârun ni uuêst / *thea* uurdegiskefti, (Hel. 3691f. エルサレムよ、汝に苦しみが生じた、汝がまことに運命を知らなかったそのために)；*des* muose mir *misselingen* (Iwein 762 そのために私は失敗せざるをえなかった)；*des* lag er tōt (Parz. 16, 10 そのために彼は死んで横たわっていた)；*des* moht er wol *gewinnen* beide liute unde lant (Nib. 25, 4 そのために彼 <ジーフリト> は人々も国も良く治めることができた)；

なお「オットフリート」以来、指示代名詞の属格と具格を組み合わせた *thes* diu + 比較級という定式が現れる：Ni liuhte līoht fuer, man fuih lōbon *thes diu mēr*, (Otf. II. 17, 21 そのために一層褒めてもらうために汝らの光が輝くようなことがないようにせよ) 1000年頃には、*thes* thiū > *theste* という融合が起こり、中高ドイツ語で *deste*, 15世紀半ばから *desto* となったが、上の例文が示すように *des* は本来、動詞を補う原因の属格であった。

(B) 認容の具格的属格は原因の属格から発展したもので、中高ドイツ語に散在する：und al *des spils*, *des* er getete, so smacte ie der veige slac (Tristan 7837 彼がなした見事な <豎琴の> 演奏にもかかわらず、いつもあの忌まわしい <傷の> 臭いがした)；wie solde ich armez wīp, *alsother nôt* bī sinne sīn (Parz. 616, 27 哀れな女の私が、どうしてこのような苦しみにもかかわらず、心を乱さないでいられますか)

(C) 関係の具格的属格は「...に関して」の意味をもち、先ず主語の構成要素であるが人間そのものではないものに用いられる：*híntarquement múates* (Otf. V. 20, 83 彼らは心で驚いた)；*si wehselten beide der herzen under in* (Iwein 2990 彼らくイーヴェインとその妻は心を取り替え合った)。次は主語とかかわりのない事物で、原因の属格から派生した用法である：*Thes ni gilôbiad mi these liudi*: (Hel. 5091 そのことに関してこれらの人々は私を信じない)；*got sol iuch bewarn der reise an allen êren* (Nib. 1154, 2f. 神がおん身の旅路を守り、誉れを保たせて下さるように)。最後に人間を表す属格があるが、これに対しては別の解釈も可能である：*waz wirdit aber unser armon* (Willer. 52, 29 しかし我々貧しい者たちはどうなるのか)；*waz scol mîn nu werthen* (Rolandslied 6967 さて私は一体どうなるのか)；*sîn kan niht anderes werden* (Kudrun 1464, 1 彼には他には何も仕様がない)。関係の具格的属格が殆どの場合 *waz* の後にあることから、ベハーゲルは部分の属格から発展したと推測している。

(D) 手段と方法の具格的属格についてベハーゲルは、「歴史的関連の解明が特に難しい用法」と述べているが、原因の属格と他の属格との関連に関する前掲の彼の疑問と同様に説明できる (Ibid. S.601)。繰り返すならば、印欧祖語・古インド語において既に単数の属格と奪格の形態は融合しており、一方で奪格と具格が機能面で競合していたため、具格の機能が属格にも及ぶのを奪格が媒介した、と筆者は考える。

具格的属格のこの用法は、「語る」などの動詞と、表現手段を表す属格名詞とが共起し得ることから始まる：*sagda huô he iru selbo gibôd / torohtero tēcno*. (Hel. 5943f. <奇跡を見た女は> 彼 (注：復活したキリスト) が自ら彼女に輝くしるしで命じた様子を語った)。「アウトフリート」における複数の具格的属格 *worto* の使用をベハーゲルは単に「頻繁」とし、例の如く使用頻度を挙げていないが、筆者の調査では *worto* の用例80中の59は具格的属格であり、そのうち55は副詞 *harto* と押韻している。*harto* が *sehr* の意味で動詞を強調するために多用されることが、*worto* の多用を促した要因の一つであるに違いない：*Er zâlt iz in*

ouh hártou ófonoro wórtou, (Otf. IV. 1, 17 彼<キリスト>は彼らに率直な言葉で語った) ; Ih wisero wórtou giwárnon iuih hártou, / rēhtera rēdina; (Otf. IV. 7, 23 私は汝らを賢明な言葉で、ふさわしい話で武装させる) ; これらの表現手段を表す具格的属格は「区分の移動」(Verschiebung der Gliederung)によって部分の属格から生じたとベハーゲルは推測する : diurden iro drohtin dādiun endi uuordun, / ...endi filu sprākun / uitsaro uuordo, (Hel. 2966ff. 彼らは主を行いと言葉で讃え...賢明な言葉で多くを語った)。この例文の属格の用法は、数詞・数量形容詞を規定する部分の属格に遡るが(「賢明な言葉の多くを」), その2行前に dādiun endi uuordun という具格的与格があり, 更に mid + 与格による分析的表現もある (that im that hēlaga barn / ...filu mid uuordun / torhtes getalde. (Hel. 1584ff. 彼らにあの神聖な子供が多くの奇跡を<直訳: 奇跡の多くを>言葉で語ったこと)。このことからベハーゲルは「副詞的な具格的格をもつ (mit adverbalem instrumentalem Kasus) それに対応する結合が併存していたために、この区分のずれがそれだけ早く起こり得た」と論じているが、問題のある論旨である。先ず彼は「副詞的な具格的格」として、具格的属格・具格的与格及び mid + 与格の例のみを挙げているが、既に例示したように古ザクセン語と古高ドイツ語の具格的表現として、この他に単独の具格と mid + 具格がある。「ヘーリアント」に関する筆者の調査では、具格的表現に用いられた名詞・形容詞・冠詞(類)・代名詞は総数1091語に上り、その内訳は単独の具格が113語、mid + 具格152語、具格的与格が220語、mid + 与格が391語、具格的属格が215語である。mid + 与格が約36%に達するが、他の4種類もいずれも10~20%を占め、現代ドイツ語からは考えられないほど多種多様である。次に「対応する結合の併存」, 即ち他の具格的表現の存在によって、部分の属格が具格的機能を担うことが容易になったという主張は、先に紹介したデーブルュックの説とほぼ同じである。しかし両者は格機能の移行という言語史的視点から論ずるべき問題を、余りにも単純且つ平板にヘルマン・パウル流の類推理論で処理しており、同調できない。

要 約

規範ドイツ語文法では副詞的 2 格と総称されるジャンルがあり、eines Tages などの時を表す状況語と並んで、meines Erachtens, klopfenden Herzens などの付随的状況・様態を表す熟語的表現がこれに属する。後者については、現代文学にも hochgeschwungenen Krummstabes, gleichgültigen Tons などの新しい表現が時折見られ、まだ生産力を失っていないことを示している。では元来帰属・所有を表すはずの 2 格に、なぜこのような用法が可能なのか。この疑問を解くためには、古ゲルマン諸語・古典語はもとよりインド・ヨーロッパ語全体を視野に入れて、印欧祖語・古インド語の格機能と諸言語の格形態との対応関係を総合的に把握する必要がある。

両者の錯綜した関係を図示したのが「格機能・格形態対照図」1 及び 2 であり、前者はインド・ヨーロッパ語本来の格機能とギリシャ語・ラテン語の格形態との関係を、後者は同じく古高ドイツ語・古ザクセン語及び現代ドイツ語の格形態との関係を示している。この図から現代ドイツ語の時を表す副詞的 2 格は位格的属格であり、付随的状況を表すものは具格的属格であることが分かる。また時代と共に格形態の融合が進行してきたことも明らかであるが、印欧祖語において既にこの注目すべき言語現象が始まっていたことを見落としてはならない。即ち両数では八つの格機能が僅か三つの格形態に集中し、中性では単数・複数とも主格・対格・呼格が融合し、すべての性において単数では *o-* 語幹以外の属格と奪格が、複数ではすべての語幹の与格と奪格が同一形態を取っていた。古高ドイツ語・古ザクセン語はいずれも 5 種類の具格的表現を有するが、そのうちの具格的属格に関してグリムは、単に古ゲルマン諸語の属格が他の格と接触する場合の一つに数えるだけで、その淵源に迫ろうとはしない。またベハーゲルは具格的属格と他の属格との関連について再三疑問を発し、特に手段・方法の具格的属格を「歴史的関連の解明が最も難しい用法」と呼び、「対応する結合の併存」というパウル流の類推理論に活路を見出そうとした。このように同時代の主流をなす言語理論の制約を受け、言語史的考察が不徹底であるという点では、ベルンハルトやデ

ールブリュックも同断である。

古インド語の情動の動詞は、その原因を表すために具格・奪格の双方を取り得た。この機能面での具格と奪格との競合と、前述の形態面での単数の属格と奪格との融合との接点に奪格が位置しており、これが媒介して、道具・手段、原因・理由などの具格の機能が属格にも及んだものと思われる。この言語史的現象はまず単数から始まり、後に複数に波及したと推定できる。従って属格本来の機能と具格的属格の機能とは、発生において全く異質なものであるというのが、ベハーゲルの疑問に対する答えである。

注

- 1) *Deutsche Erzähler 1920-1960*. Stuttgart 1985, S.68.
- 2) *Ibid.*, S.188.
- 3) *Ibid.*, S.263.
- 4) *Deutsche Erzähler des 20. Jahrhunderts von Joseph Roth bis Hermann Burger*, Zürich 1994, S.143. なお Georg Britting: *Der Major* (1933) にも同じ表現が2度使われている。Die Magd trat in diesem Augenblick in die Stube, *gesenkten Blickes*. (下女がこの瞬間に部屋に入って来た、目を伏せて。 *Ibid.*, S.87); Draußen im Flur stand der Major, *gesenkten Blickes*: (外の廊下に少佐が立っていた、目を伏せて。 *Ibid.*, 102)
- 5) *Ibid.*, S.144.
- 6) *Ibid.*, S.324.
- 7) *Ibid.*, S.391.
- 8) *Deutsche Erzähler des 20. Jahrhunderts von Arthur Schnitzler bis Robert Musil*, Zürich 1994, S.248.
- 9) *Ibid.*, S.448f.
- 10) *Ibid.*, S.450.
- 11) *Musik-Erzählungen*, Stuttgart 1990, S.155.
- 12) *Ibid.*, S.156f.
- 13) *Ibid.*, S.201.
- 14) *Ibid.*, S.248.
- 15) klopfenden Herzens は心臓, leichten/schweren Herzens は心を意味する。
- 16) 注4で挙げた Britting の二つの用例を加えた。

- 17) Krahe Hans: *Grundzüge der vergleichenden Syntax der indogermanischen Sprachen*, Innsbruck 1972, S.109.
- 18) 「格形態・格機能対照図」は筆者の創案である。拙論『古ザクセン語と古高ドイツ語における具格的表現の諸相(2)——「ヘーリアント」及びギリシャ語・ゴート語聖書の具格的属格』——関西大学文学論集 文学部創設70周年記念特輯(第44巻1～4号)(1995)189ページ参照。なお前置詞による分析的表現は含まない。
- 19) 10世紀から11世紀にかけて、福音書や教会文書を主としてギリシャ語から翻訳するために、ブルガリアとマケドニアを中心として古教会スラブ語が成立し、スラブ文語の基礎を築いた。(なお木村彰一「古代教会スラブ語入門」(東京 1985)の書名のように、AltslawischのAlt-を今なお「古代」と訳す向きがあるが、中世の言語である古高ドイツ語・古英語を「古代」高地ドイツ語・「古代」英語と呼ぶのと同様、歴史的知識欠如の誹りを免れない。)この言語の七つの格の中に造格(=具格)があり、道具・手段・時を表す。また現代ロシア語も六つの格の一つである造格が機能・資格・道具・手段を示し、「...である,...になる,...に見える,...と分かる」などの連辞的動詞の述語にも用いられる。チェッコ語の7格も手段・移動の場所・方向・時の他に述語としての機能がある。このようにギリシャ語・ラテン語及び近代のゲルマン系・ラテン系言語から消失した具格が、スラブ系言語に保たれ、しかも印欧祖語・古インド語すら持たなかった述語的用法が新たに加わるといふ、機能の拡大が認められる。
- 20) *he* について Köbler, Gerhard: *Gotisches Wörterbuch*, Leiden 1989 は „Adv. nhd. wem, mit wem, womit, um was, irgenwie, etwa“ と記し、文法書の記述との相違が目立つが、千種真一「ゴート語辞典」(東京 1997)では「[副] (*hvas* の中性具格形) <疑問>何と [に], 何をもって— [比較級の前で] どれだけ—<不定>何のことで, どうにかして」と改善されている。とはいえケーブラーと千種が挙げている意味はすべて印欧祖語・古インド語の具格に還元できるものであり、副詞に分類することに対して筆者は疑念を抱かざるをえない。また *pe* の項目では、前者は „Sg. N. Instrumental des Demonstrativpronomens *sa* = Adv.“、後者はこの順序を逆にして [副] (指示代名詞 *sa* の中・単・具格形) と説明する。この語は *ni pe haldis* として1度だけ使われ、前者は „nicht um so mehr, keineswegs“, 後者は「それ以上に...ない, 決して...ない」と同じ解釈を示している。この語句が否定の強調を婉曲に表現しているために *pe* は原義から離れてはいるが、成句の意味に惑わさ

れることなく、代名詞の具格とするべきであろう。更に *was* に前接語 *-uh* を付けた不定代名詞 *wazuh* (= jeder) の中性具格形 *wêh* に関して、Krause, Wolfgang: *Handbuch des Gotischen*, München 1968³ に「jedenfalls, nur という副詞的な機能しか持たず、〈フィリピン人への手紙〉 1, 27 に *patainei* „nur“ と注が加えられている」(S.201) とあり、ケーブラー及び千種はいずれも「副詞, *wazuh* の具格形」とし、千種は更に「注に *patainei* とある」と付記している。しかしこの注は Streitberg, Wilhelm: *Die Gotische Bibel* (Heidelberg, 1919²) にはあるが、その初版 (1908) より17年前にアメリカで出版された Balg, G.H.: *The First Germanic Bible* (Milwaukee 1891) にはない。字義通りに解すれば、関係・観点を表す中性具格 *hieh* は「何に関しても」という意味であり、強いて *patainei* と置き換える必要は無い。このような言語史的立脚点から、筆者は *we*, *pe*, *wêh* を副詞ではなく、代名詞と見なす。

- 21) Bruckner, Wilhelm: *Die Sprache der Langobarden*, Straßburg 1895, S.179.
- 22) 古高ドイツ語と古ザクセン語がもつこれらの具格的表現については、注18で挙げたものの他に、次の一連の拙論を参照されたい。1) 「ヘーリアント」における古ザクセン語の具格(1)——言語史的考察(関西大学文学論集第42巻第1号, 1992) 2) 古ザクセン語における具格の形態と用法——その言語史的位置——(阪神ドイツ文学会誌「ドイツ文学論攷」第34号, 1992) 3) *uuârun uuordun*——「ヘーリアント」における具格的与格(関西大学独逸文学会誌「独逸文学」第37号, 1992) 4) 古ザクセン語における具格及び具格的与格——言語史的考察(京都ドイツ文学会会報 第19号, 1993) 5) 古ザクセン語と古高ドイツ語における具格的表現の諸相(1)——「ヘーリアント」と「オットフリート」——(文学論集第43巻第2号, 1993)
- 23) 男性名詞 *hugi* の具格は本来 *hugiu** であるが、母音の重複により語末音消失が起きた。
- 24) 中性名詞 *lid* は具格形 *lidu** を取ることが可能であるが、同じ行の後半の *nide* と脚韻を踏む必要上、与格形 *lide* が用いられた。
- 25) *speron* は具格的与格である。
- 26) 弱変化形容詞は *-u/-o* という具格の語尾を取り得ないため、代替形として *mikilun* という具格的与格が使われた。Sehrt, Edward H.: *Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur altsächsischen Genesis* (Göttingen 1966²) では *gôdum* (*guoden**) と C 写本にのみある形を括弧内に記し、いずれも弱変化・中性単数与格としているが、*-um* は強変化の語尾で、ゼールトの誤譯で

ある。また *gumscepi* は、注23) の *hugi* と同じく語末音の *-u* が消失した語形である。

- 27) *jn. Lügen strafen* という熟語に現れる *Lügen* の格について大半の辞典が言及していないのは遺憾である。Brockhaus-Wahrig: *Deutsches Wörterbuch*, 6 Bde.(Wiesbaden 1980-84), *Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache*, 6 Bde.(Mnnheim 1976-81), Klappenbach, Ruth: *Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache*, 6 Bde.(Berlin 1974-78 7. Auflage), Mak-kensen, Lutz: *Deutsches Wörterbuch* (München 1986¹²), 小学館 独和大辞典 (東京 1985), 郁文堂 独和辞典 (東京 1987) 等々がそうであるが、Grimm, Jacob und Wilhelm: *Deutsches Wörterbuch* 32 Bde. の第 6 卷 (hrsg. v. Moritz Heyne) が次のように記述しているのはさすがと言いたい。「ここで用いられている単数属格 *lügen* (筆者注: 周知のようにグリムの辞典は名詞の頭文字に小文字を使う) を前置詞で書き換えてみると、昔の言語にふさわしいこの結合が明らかになる: *das mir erlaubt sei, jn. umb ein lügen zu strafen* (Eck bei Luther 1,162 或る人を嘘をついた咎で罰することが、私に許されていると) より明瞭になるように、属格が冠詞や代名詞で規定されるのは普通はごく稀である。」
- 28) 辻直四郎: *サンスクリット文法* (東京 1974) 270ページ。
- 29) ギリシャ語などインド・ヨーロッパ語に広く分布し、現代英語にも残っている (*Yesterday he worked twelve hours.*). この種の対格及びそれと共に起する動詞については従来諸説があり、Brockhaus-Wahrig は *laufen* のこの項目に (400 od. 500) と記し、*der Regen rinnt* のような *S+Vb* のタイプの自動詞か、*er wiederholt die Frage* のような *S+Vb+AkkO* の文型に属する他動詞かを決めかねている。また小学館の独和大辞典は「様態・結果などを示す 4 格と」共に用いられる使われる自動詞とし、郁文堂の独和辞典は他動詞と見なしている。しかし筆者はこの用法の由来を考慮して自動詞とする。
- 30) テクストとして、ギリシャ語・ラテン語はいずれも最も定評のある Nestle-Aland の *Novum Testamentum Graece* (Stuttgart 1979²⁷)。及び *Novum Testamentum Latine* (Stuttgart 1992²⁸) を使用した。但し「タティアーン」(*Tatian*, hrsg. v. Eduard Sievers, Paderborn 1966²⁹) と比較する必要上、原典たるタティアーンの総合福音書の相当箇所を本文に挙げ、ネストレーアーランドのラテン語版との相違を注に記す。ゴート語聖書のシュトライトベルク版及びバルグ版については注20参照。また田川建三の言葉を借りれば「アメリカの文化的植民地主義のギリシャ語テキスト」である *United Bible*

Societies: *The Greek Testament* (1983³) を底本とする、平野保 (監修) 「日本語対訳ギリシャ語聖書 3 ルカによる福音書」(東京 1993) も参照した。因みに田川の大著「書物としての新約聖書」(東京 1997) は、博引傍証の学識と、日本の学界では稀に見る情熱的でポレーミッシュな姿勢が際立っており、近來の快著と呼ぶにふさわしい。

- 31) L 1,15. 1,53. 1,67. 4,1. 4,28. 5,12. 12,6.
- 32) 「タツィアーン」には L 4,1. 4,28. 5,12 に対応する箇所が欠けている。
- 33) L 12,6 は「タツィアーン」とゴート語聖書にはない。なお後者は10,30の途中から14,9の終わり近くまで欠落している。
- 34) Grimm, Jacob: *Deutsche Grammatik* Bd.4, 2. Teil, 1898. Nachdruck Hildesheim 1989, S.799.
- 35) Bernhardt, E.: *Zur gotischen Casuslehre* II. In: *Zeitschrift für deutsche Philologie* Nr. 13, 1882, S.14ff.
- 36) Delbrück, B.: *Synkretismus. Ein Beitrag zur germanischen Kasuslehre*, Straßburg 1907, S.216f.
- 37) 「ヘーリアント」と「オットフリート」における具格的与格 *uordun/ worton* の出典箇所については、拙論 (1993) の注27及び28参照。
- 38) Behaghel, Otto: *Deutsche Syntax* Bd. 1, Heidelberg 1923, S.594-607.

Sprachgeschichtliche Hintergründe des neuhochdeutschen Adverbialgenitivs

— eine Antwort auf die Frage Behaghels nach der Entstehung des instrumentalen Genitivs —

Yuhji WATANABE

In deutschen normativen Grammatiken werden Genitivangaben zur Zeitbestimmung wie „eines Tages“ und solche für Begleitumstände wie „meines Erachtens“ oder „klopfenden Herzens“ allgemein Adverbialgenitiv genannt. Was letztere betrifft, so sind sie noch nicht formelhaft erstarrt, weil sich oft neue Ausdrücke wie „hochgeschwungenen Krummstabes“ oder „zurückgeworfenen Kopfes“ in literarischen Werken der Gegenwart finden.

Wie sollte jedoch dem Genitiv, der eigentlich eine Zugehörigkeit bezeichnet, solch ein Gebrauch möglich sein? Um dies zu klären, muß man im indoeuropäischen Sprachenspektrum sehen, in welcher Beziehung die urindoeuropäisch-altindischen Kasusfunktionen und die Kasusformen einer anderen Sprache zueinander stehen. Diese Beziehungen werden durch „Kontrastbilder für Kasusfunktionen und Kasusformen 1 und 2“ veranschaulicht. Daraus ist zu ersehen, daß Genitivangaben zur Zeitbestimmung, sprachgeschichtlich gesehen, lokativische Genitive sind, während die für Begleitumstände instrumentale Genitive darstellen.

Im Laufe der Zeit schreitet der Synkretismus, d.h. formaler Zusammenfall ursprünglich verschiedener Kasusfunktionen, fort, was auch aus den oben genannten Kontrastbildern deutlich wird. Dabei übersieht man aber zu leicht, daß diese bemerkenswerte Spracherscheinung schon im Urindoeuropäischen beginnt: Im Dual werden Nominativ, Akkusativ und Vokativ synkretisiert, mit Genitiv-Lokativ und

Dativ-Instrumental-Ablativ ist es ebenso. Beim Neutrum haben Nominativ, Akkusativ und Vokativ in allen Numeri eine gemeinsame Kasusform. Bei allen Genera unterliegen Dativ und Ablativ im Plural, Genitiv und Ablativ im Singular (außer bei den o-Stämmen) dem Synkretismus.

Merkwürdigerweise haben sowohl Althochdeutsch als auch Altsächsisch je fünf Arten instrumentaler Ausdrücke: einfachen Instrumental, mit/mid+Instrumental, instrumentalen Dativ, mit/mid+Dativ und instrumentalen Genitiv, obwohl eigentümliche Instrumentalendungen -u/-o nur dem Maskulinum und dem Neutrum im Singular gehören. Den instrumentalen Genitiv behandelt J. Grimm nur als eine der Berührungen des Genitivs mit anderen Kasus und er erwähnt seine Entstehung mit keiner Silbe. Zwar interessiert sich O. Behaghel etwas für dieses Problem, aber er bekennt, es bleibe unklar, wie er (=Genitiv der Ursache) mit anderen Genitiven zusammenhänge und betrachtet den Genitiv des Mittels der Art und Weise als eine Verwendung, bei der die geschichtlichen Zusammenhänge besonders schwer aufzuklären seien. Dann vermutet er, der instrumentale Genitiv des Mittels, der Art und Weise sei wohl durch Verschiebung der Gliederung aus dem partitiven Genitiv hervorgegangen. Diese Verschiebung habe um so eher erfolgen können, als daneben entsprechende Fügungen mit instrumentalem Kasus gestanden hätten. Dabei führt Behaghel zwei Stellen aus „Heliand“ als Beispiele für instrumentalen Dativ und „mid+Dativ“ an. Durch diese Paulsche Assimilationstheorie versucht er, sich einen Ausweg zu bahnen. Auch die Erklärung E. Bernhardtts: ein Gegenstand oder etwas dazu Gehöriges sei als ein Instrument anzusehen, deshalb könne der Genitiv eine Ersatzform für den Instrumental sein, steht unter dem maßgeblichen Einfluß der psychologischen Assimilationstheorie und zeigt uns, daß sein objektiver sprachgeschichtlicher Standpunkt schwankt. Das ist bei B. Delbrück auch der Fall, der

behauptet, die vielen Fälle des instrumentalen Dativs *worton* neben Verben des Sprechens brächten den Leser dazu, auch im Genitiv *worto* einen instrumentalen Sinn zu *empfinden*.

Bei altindischen Verben, die eine Gemütsbewegung bezeichnen, drücken sowohl der Instrumental als auch der Ablativ die Veranlassung der Gemütsbewegung aus. Also konkurrieren in dieser Funktion die beiden Kasus miteinander. Wie gesagt, werden schon im Urindoeuropäischen der Genitiv und der Ablativ im Singular (außer bei den o-Stämmen) synkretisiert. Das heißt, es besteht im Ablativ der Berührungspunkt zwischen der funktionellen Konkurrenz des Instrumentals und des Ablativs einerseits und dem formalen Zusammenfall des Genitivs und des Ablativs andererseits. So ist es dazu gekommen, daß instrumentale Funktion durch diesen Berührungspunkt auch vom Genitiv getragen wird. Die Antwort auf die Frage Behaghels, wie der Genitiv der Ursache mit anderen Genitiven zusammenhänge, soll lauten: jener ist entstehungsgeschichtlich ganz anders geartet als diese.

Der Synkretismus bringt notwendigerweise analytische Ausdrücke mit Präpositionen mit sich, um die Zweideutigkeit zu vermeiden. Von der Synthese zur Analyse: Kein Zweifel, daß das eine Hauptströmung in der Sprachgeschichte ist. Aber die Geschichte hat auch eine Nebenströmung, die sich in einer anderen, ja, manchmal in umgekehrter Richtung richtet. Einige treffende Beispiele dafür seien aufgezählt:

1) Das Griechische hatte schon den Ablativ aufgegeben, während ihn das Lateinische wieder aufnahm. Dann hat er die Funktionen des Ablativs und des Lokativs zugleich in sich vereinigt und sich endlich zum funktionsreichen Mischkasus entwickelt.

2) Weder das Griechische noch das Lateinische kennen den Instrumental. In der gotischen Bibel wird er nur 13mal gebraucht, und zwar auf Pronomina Singular Neutral beschränkt. Im Unterschied dazu

findet sich im Althochdeutschen und Altsächsischen sein Gebrauch äußerst mannigfaltig, als ob ein Untergrundstrom unerwartet aus der Erde hervorquelle.

3) Neuslawische Sprachen haben dem Instrumental eine neue Funktion als Prädikat hinzugefügt, die sogar das Urindoeuropäische und das Altindische nicht hatten. Dadurch verfügen sie über zahlreiche Instrumentalfunktionen, die in der indoeuropäischen Sprachgeschichte noch unerhört sind.